

平成26年度 夏季企画展「角倉素庵と俵屋宗達」を終えて

著者	林 進
雑誌名	阡陵 : 関西大学博物館彙報
巻	69
ページ	8-10
発行年	2014-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023849

平成26年度 夏季企画展「角倉素庵と俵屋宗達」を終えて

林 進

夢のような四ヵ月間でした。企画展「角倉素庵と俵屋宗達—江戸初期の能書家と絵師、知られざる二人の偉業—」(2014年6月15日～7月19日)は、今も、私の心に鮮明に面影として残っています。

9年前に財団法人大和文華館(学芸員)を定年退職して以来、この度、平成26年度春学期の期間限定ですが、関西大学博物館の嘱託学芸員(肩書きは企画コーディネーター)を拝命しました。この齢になって、学芸員になるとは、思ってもみなかったことです。再び学芸員の仕事の楽しさを経験することができました。ありがたいことです。

秋学期の10月から11月に博物館実習展を行う学芸員資格課程の受講生の参考になればと思い、本誌をお借りして、今回の展覧の立案と実施について記しておくことにします。

4月11日(金)、博物館実習の第一回目の授業(クラス編成・日程表配布等)を終えて、博物館館長室にて、米田文孝教授、熊博毅博物館事務長、山口卓也学芸員、そして非常勤講師林進が、夏季企画展の実施について話合いました。以前に、実習展に際して、私のコレクションによる小展覧(実習展と同じ6日間、壁付大ケースを使用)を開くことを希望しておりました。

本年、従来の第一展示室をリニューアルして特別展示室に改めたので、現在開催されている平成26年度春季企画展「関西大学名品万華鏡」(4月1日～5月18日)の後、同特別展示室で、6月から7月の一ヵ月の期間で、何か企画展をやっていたらいいかというお話でした。願ってもないことなので、すぐにお引き受けしました。会期は、博物館の要望により6月15日(日)から7月19日(土)に決まり、展覧のテーマは二週間後に通知することになりました。早速、山口氏に特別展示室の図面(ケースの形態と個数、各法量、配置。)のコピーをお願いしました。まず展示空間を把握することが、展覧企画の第一要件だからです。「名品万華鏡」展のケースの配置は変えないで、そのまま使用することにしました。理由は、鑑賞者の導線が比較的スムーズであったからです。後日、このケースの配置が講演会をこの展示室で行うことを可能にしました(写真1)。

本年、特別展示室の左側壁面に可動式壁面を持つ大型壁付ケースが新設されました(写真1)。屏風絵など大型作品の展示が可能になりました。旧図書館(関西大学最古の建物)の閲覧室であった現在の特別展示室には、二列に3本、計6本の角柱が立っており、天井が高く、



写真1 講演会「素庵と宗達」講師 林 進

その白い漆喰が美しく、部屋全体に重厚な趣が感じられます。古い建築の魅力です。

平成26年度夏季企画展は予定していなかったので、展覧会開催の予算が当然ゼロであることは承知しておりました。展観が始まる6月15日まで、準備期間はわずか二ヵ月間しかありません。ですから、まず出来ること、出来ないことを区別しました。展覧会図録及びポスターの制作は、予算と時間がないので行わない。美術品専用輸送車（梱包・開梱作業、及び保険が含まれる）は使用しない。出陳その他の謝礼金はなしにする。関連催事の講演会（一回）とギャラリートーク（列品解説）は、自分自身（林進）が行い、その日時は担当の博物館実習の日時に当てることにしました。一方、企画展に必要な展観チラシ（広報用）、出陳品目録、キャプション等展示札の作成は、事務経費の一部を当ててもらおうことにしました。

今回の企画展のテーマを「角倉素庵と俵屋宗達」にしました。現在、自分が研究しているテーマであり、すぐに実施できると思ったからです。かつて大和文華館で平成14年（2002）秋に特別展「没後三七〇年記念・角倉素庵一光悦・宗達・尾張徳川義直との交友の中で―」を行い、また昨年6月から本年3月まで、東京渋谷Bunkamuraで毎月一回の連続講座（全10回）「宗達を検証する―友人角倉素庵の視点から絵師宗達の真実に迫る―」を行いました。素庵と宗達の作品は、すでに実際に見ておりましたし、かつて取り扱ったことがありました。

実は、問題は、「角倉素庵と俵屋宗達」というテーマです。一般の方はご存じないと思いますが、素庵と宗達の二人の関係は、今まで日本美術史で取り上げられたことはありません。従来美術史の枠組みでは、本阿弥光悦を中心とする構図で語られております。すなわち、俵屋宗達は光悦によって見出された画家というのが定説（通説）だからです（光悦と宗達の実証することは出来ません）。また角倉素庵の名前は、美術書のどこにもありません。新たな枠組みを提示することは、学界と世間の通念を相手にすることで困難なことです。一方、楽しいことです。

関西大学博物館から私に提示されたのは、「関

心のあるテーマを、すきなようにやってよい」ということでした。今回、私は学界の通念、世間の常識にとらわれない学問のフロント（前線）を示す展観を試みました。それが大学博物館の真の目的だと思ったからです。公立や私立の博物館や美術館では、きわめて難しいことです。入館者数や採算を考慮しなければならないからです。

私は、定年後、研究のために、素庵と宗達の関係史料（書跡が主）、及び寛永期の書跡資料を精力的に蒐集し、五十件ほどを蒐集しておりました。博物館の特別展示室のケースに展示できる点数は、大型の屏風を含め、およそ百点と見ました。ですから、あとの五十点は親しい個人コレクター（お二方）、関西大学図書館ほか大学図書館・博物館（三ヵ所）、私の研究仲間に、展観の意義を理解していただき、さいわい希望する作品を拝借することができました。大阪青山歴史文学博物館と大阪樟蔭女子大学図書館は、作品貸与の条件として、美術専用輸送車と保険を掛けることが条件でありましたので、関西大学博物館と大学当局との協議で、二日間（借用と返却、四ヵ所）の美術品輸送車の使用が認められ、保険込みで日本通運に依頼しました。展覧会が成功したのは、大学当局の英断があったからだと思っています。また「関西大学創立百三十周年記念事業・関西大学博物館開設二十周年記念」と銘打ったことが有効でした。当初、コレクター自身に作品の輸送をお願いしておりました。厚かましいことを考えていました。

5月に入り、最初にA4判の「展観チラシ」（表裏カラー図版）を作りました（写真2）。これは展観関係文書の中で最も重要な広報文書です。チラシのデザインは、博物館が長年依頼している印刷会社のデザイナーによるもので、上品なチラシに仕上がりました。

つぎにやることは、「展示設計」です。展示ケースの図面に展示資料の名称、小テーマを書き込んでいきます。ケースは、壁に付けられた独立タンス型ケース（A1～A10）10基、俯瞰ケース（B1～B10）10基、独立行燈形ケース（C1～C4）4基、壁付長大ケース（固定）です。それぞれテーマ（「角倉素庵書状より判明する真実―素庵の人柄と宗達の居住地―」「角倉素庵の書跡」など）を設け、個々のケースに「展



写真2 展覧チラシ(表・裏)

示デザイン」を行いました。ちょうど論文の章立てを作るように、各ケースに資料(予定作品)を当て嵌める作業です。それによって、必要な展示資料がわかります。それに基づき、「所蔵家別借用リスト」を作成します。ここにすべての情報(所在、連絡、人名など)を書き込みます。つぎに「出陳品目録」を作りました。今回は展覧図録を作りませんので、その代りA3判用紙を二枚重ねて二つ折りにし、8ページの目録(中綴じなし)を作りました。「展覧の趣旨、及び角倉素庵と俵屋宗達」(見開き二頁)、「出陳品目録」(見開き二頁)、「素庵・宗達関係年譜」(見開き二頁)、「素庵書状」と「嗟峨本」の解説文を掲載しました。私がこれまで研究してきた成果をこの「出陳品目録」に集約しました。「出陳品目録」から、「作品のキャプション」を作成します。

7月5日(土)のワークショップ「嗟峨本活字フォントの魅力」は、博物館事務局において急遽開催されたものです。版本書誌学の第一人者・森上修氏、多摩美術大学教授でグラフィックデザイナー・永原康史氏、著名な書体設計士・鳥海修氏、ブックデザイナー・尾形忍氏の話はいずれも興味深く、有意義な会になりました。大部な配布資料は今後、活字書体研究やフォントデザインに大いに役立つものでしょう。

また7月12日(土)の講演会「素庵と宗達」(講

師・林進)は、特別展示室で作品に囲まれての開催となりました。出席者は約90名で、独特な雰囲気の中での講演を楽しんでいただきました。講演と同じ内容の書籍(仮題「角倉素庵と俵屋宗達」)を、来年、東京の敬文舎から出版する予定です。また再来年に八木書店から研究書『宗達を検証する』(連続講座をまとめたもの)を出版する予定です。今回の出陳品を多数掲載いたします。

藪田貫館長のご提案、熊氏撮影になる二枚一組のチケットフォルダー(宗達画をデザインしたものは、今回の企画展の素晴らしい記念の品になりました。

謝辞

この度の展覧に、貴重な作品と書籍をご貸与賜りました所蔵家の皆様、関西大学図書館・大阪青山歴史文学博物館・大阪樟蔭女子大学図書館の関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

今回の企画展では、学芸員の山口氏をはじめ博物館事務局の皆様、展示室受付の大学院院生の皆様、いっしょに企画実施を行っていただきました立命館大学非常勤講師本多潤子さんにはたいへんお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

関西大学文学部 非常勤講師 元大和文華館学芸員